

■ 体験版 ■

遠い未来、魔王を討伐する事となる英雄ビル・ブライトンの若き日の

—— 未だ、ただのビルの物語 ①

なつめ なつめ

夏目 棗

□ □ 注意事項 □ □

普通にこのPDFファイルを開くとウインドウサイズで開きます。パソコンの設定にも拠りますが多少縮小されて表示されるのではないかと思えます。文章を読むには問題ありませんが、CGを鑑賞する場合は多少拡大(100〜125%くらい推奨)して戴いた方が綺麗に表示される筈です。

また、「Shift」＋「Ctrl」＋「N」で希望の頁へジャンプできます。

□ □ 登場人物 □ □

● ビル(苗字はまだない(笑)) 〓 ヒト族。十八歳。

遠い未来、魔王を討伐する事となる……らしい。

● ミルチ 〓 狼人(ろうにん)族とヒト族とのハーフ。二十七歳。

身長… 165 cm、体重… 59 kg、スリーサイズ… 105(Hカップ)・63・92。

酒場『女神の棲家(すみか)』のNO.1ウエイトレス。メイド服のような制服を小器用に崩して大きな胸元の谷間を強調させている。酒場が閉店する頃にはその〓谷間に〓チップの銅貨(たまに銀貨)が零れるほどに挟まれている。更に店では帽子で隠しているが彼女の頭には、ちよこん、と『犬耳』が生えている(ハーフなので小さめで尻尾はない)。

また、通り名を『ダンジョンデストロイヤー』ミルチ。彼女が走破したダンジョンはその後モンスターを倒しても何もドロップしない……という噂から付いた〓二つ名〓だとか。

● タダノ・ハナコ(只野 花子) 〓 ヒト族。〓 転生者〓。三十八歳。

身長… 167 cm、体重… 55 kg、スリーサイズ… 97(Gカップ)・58・99。

通り名を『全快の天使』ハナコ。彼女が横を通るだけで瀕死の怪我人も全回復(全快復)する……という噂から付いた〓二つ名〓である。何故だか回復魔法が駄々洩れするらしい(笑)。それでMPが枯渇しないというのも凄い話だ。

● タダノ・タロウ(只野 太郎) 〓 ヒト族。〓 転生者〓。四十二歳。



酒場『女神の棲家(すみか)』の裏口から入った少年は目当ての女を見付け、小さく口笛を吹いた。

女が気づいて遣ってくる。

酒場のウエイトレスの制服を小器用に着崩して大きな胸元の谷間を強調させていた。酒場が閉店する頃にはその「谷間に」チップの銅貨(たまに銀貨)が挟まれているのだ。今夜は開店したばかりなのでまだ挟まれていなかったが(笑)。

名をミルチと言った。

この酒場の『NO・1』だ。

ミルチは店の込み具合を、ちらつ、と見てから少年の前に上半身を屈めた。丁度、谷間が彼の目の高さに成るように計算している。

まあ、ある意味で彼は「お得さん」でもあった。いつも銅貨一枚でトイレで抜いてやってきたのだ。

いつもは手渡しの彼が谷間に硬貨を差し込んだ。

「生意気な真似しやがって」

笑いながら取りだした「それ」が金貨だと気づいてミルチが顔色を変えた。

「お前、これ……」

(まさか、どこかで…)

一瞬脳裏を過(よ)ぎった疑惑を直ぐに否定する。

スケベで小ズルい事もするが、盗みだけはしない子だ。

それに、彼の姿を見れば納得だ。

少年の服は痛みが激しいし身体の、あち、こち、に擦り傷も見られた。そういえば、暫く彼の顔を見ていなかった事に気が付いた。

「ちよっと、待ってな」

そう言つてミルチは厨房に戻つていった。何やら女将(おかみ)さんに頻りに頭を下げている。

それから少年の前に戻ると言った。

「こつちだ、付いてきな」

そして、先に立つて歩き始めた。

いつものトイレの横を過ぎて少年が戸惑いを見せる。彼女は更に奥までいって階段を登り始めた。

少年が戸惑いながらも付いてくるのを確認して、ミルチは二階の奥の部屋の扉を鍵で開けて中に入った。

入りしな少年に顎を杓った。

続いて、不安そうに入室した少年が、きよろ、きよろ、と部屋を見廻す。
多少散らかってはいるが小奇麗に纏(まと)められた(本人には言えないが)女の子っぽい部屋だ。

「あの、ここは……」

「あたいの部屋だよ、見りゃ判るだろ」

「えっと……」

「あんなモン(金貨のコトだ)貰ってトイレで済ます訳にいかないだろっ？」

「お、お店は？」

「女将さんに無理言って休みを貰った」

それは、つまり、今夜は、彼女を、独占、できる？ ……という事だ。
少年は戸惑いながらもそれを心で反芻した。

「一応、訊いとくが……」

ポケットから貰った金貨を取りだしてミルチが確認する。

「これ、丸々貰って良い……って事だよね？」

チップにお釣りを求めたら一生の顰蹙(ひんしゆく)モノだ。

少年は、くび、くび、と頷いた。

「ホントは先に風呂に放り込みたいが、ビルも一発抜かないと収まらないだろ？」
多分（今夜だけでなく）初めて名前で呼ばれて少年が頬を染めた。

部屋に充滿する女の子っぽい匂いと、部屋の主が振り撒くフェロモンに中（あ）てられて少年は先ほどから前屈みになっていた。

「とりあえず、口で一発抜いてやるから全部脱ぎな」

そう言つてミルチは自分もウエイトレスの制服を脱ぎ始めた。

エプロンドレスのような酒場の制服を、すとんと床に落とすと、下から現れたのは黒のブラ・ショーツ・ガーターベルトに吊り下げられた黒のストッキングだ。

「ミルチ、かっけーっ！」

「エロ○キの癖にナマ言うんじゃないよ……それと『ミルチ、さ、ん、』なっ！」

少年の頭を、ばこん、と小突いてからミルチが脱衣を手伝つてやる。最後の一枚に手を掛けると些か抵抗があった（笑）が、あっさり、脱がされてしまった。

曝（さら）けだされた少年の股間を、ガン見、してミルチが言った。

「全く、エロ○キの癖に生意気なモンぶら下げやがって」

「へへへ、ミルチを、ひい、ひい、言わせてやるからなっ！」

どこかで聞きかじったような科白に笑いながらミルチが言った。

「ミルチ、さ、ん、……だろ？」

そして、少年の腕を引いてベッドに坐らせると、ぐいつ、と股を開かせてその間に跪いた。その途端、少年が声をあげた。

「ミルチ、その耳っ!？」

店では何故かいつも帽子を被っていたミルチの頭に『犬耳』が生えていた。

「店の客に言うんじゃないよっ！」

そのまま、ちろんっ、と上目遣いで見詰めながらミルチの唇がビルの《逸物》を啜え込んだ。

「おひゃあう☆彡※◎×㊀☆っ!？」

言葉にならない悲鳴が洩れる。

いつもは手で抜いて貰っていたから女の口に包まれたのは当然初めての経験だ。

ミルチの舌がまるで別の生き物のように口腔で暴れ廻る。

直ぐに過って覚えのない昂りに見舞われる。

腰が、がく、がく、と震える。

歯を喰い縛って射精欲求を堪える。

金貨一枚を一瞬で終わらせたら泣くに泣けない。

「み、ミルチ……ま、まっ……」

泣きそうな声が聞こえ、ミルチが舌を止めた。

根元を輪にした指できつく絞めつけて口腔から吐き戻す。

「あとで、何発でも抜いてやるから、まずは射精(だ)しなっ！」

その言葉が耳に届いた瞬間、ビルの腰が、びく、びく、と震えた。

慌てて咥え直したミルチの口腔にビルは、あっけなく、果てたのだった。

喉奥を穿つ激しい射精を平然と受け止めて、ミルチが喉を鳴らして嚥下してゆく。

「ごきゅ、うくん、ごきゅ…うくん、くきゅ…」

自分の射精(だ)したモノを、惚れた女が喉を鳴らせて吞んでくれた。

幸せ過ぎてビルはベッドに倒れ込んだ。

「好(よ)かったかい？」

ミルチの言葉に、くび、くび、と首肯する幼顔の少年を見遣る彼女の視線が優しかった。

大量に射精したにも関わらず未だ「ガチ勃起」している彼の先っぽを再び咥え、ずっ、ずっ、

ずう、と音を立ててミルチが「お掃除フェラ」を始めた。

最後に「幹」に浮きでた血管をなぞるように舐め廻してから、漸くミルチは幼顔に似合わぬ

彼の「逸物」を開放したのだった。

「この後、最後までスルけど、あたいが「初めて」で後悔しないかい？」

今更のコトを訊かれて少年が少しだけ、むっ、とした。

「好きな女とか、居ないのかい？」

好きな女から言われると、更にメゲる。

「最初に言っとくけど、今夜は朝まで好きなだけシテ良いが、明日の朝『目が覚めたら他人だから』……いつまでもオレの女みたいな顔をしてたらぶっ飛ばすぞ、良いな？」

これからイタそうという直前に釘を刺されて、流石に凹むが仕方ない。彼女は恋人でも何でもないのだ。金貨一枚の関係なのだ、と思い知らされる。

「み、ミルチ……さん……」

『さん』を付けたので優しく返事をしてやる。

「なんだい？」

「お、オレ……あの……もう……」

「もう、なんだい？」

「ち、ちんちんが、痛くて……」

「まったく、堪え性のない。お子さまちんちん」だなあ」

笑いながら少年の身体を抱えあげてベッドに放った。

中々に筋力のあるお姉さんだ。

そして仰向けになった少年の股の上を膝立ちで跨いだ。

「さてと、今からビルのちんちんが、大人のちんぽになるんだ、しつかり、目に焼き付けておくんだよっ！」

スマタで何度も腰を振って充分に愛液を塗(まぶ)した《逸物》を握り起こして、愈々だ。

ミルチが《鬼頭》を《膣口》に宛がった。

「いいかい、今夜は何度でもシテ良いから、イキそうになったら我慢しなくても良いけど……目一杯我慢したら、もつと、もつと、気持ちいい筈だから、オトコを見せるんだよっ(笑)」
結合部分(いや、結合しようとしている部分)を、ガン見、したままビルが、くび、くび、と頷いた。

それを合図にミルチが腰を沈めてゆく。

膨らんだ《鬼頭》が泥濘に沈み、ゆっくり、と呑み込まれてゆく。

快感が、ぶるっ、とビルの背を振るわせる。

しかし、それは反面教師のようにミルチの背筋も振るわせた。

それなりに男性経験も積んできたミルチにとつても、過去にまるで覚えのないような存在感が彼女の《膣壁》を押し拡げながら侵入してくる。

「あおおおおおっ ♡」

ミルチの咽がエロい声で哭いた。

更に、彼女の背筋を快感が、ぶる、ぶるっ、と昇ってゆくのが見えた。

やがてミルチの最奥を、ごっつん、と突付いた瞬間……彼女は軽く達していた。
「あふうんんんっを♥」

聞いたコトのない、エロ可愛い嬌声(こえ)に、ビルの《逸物》も慟哭した。
しかし、事前に言われた言葉を思い出し、彼は必死に堪えた。
今にも動きだしそうなミルチの腰を掴んで、潮が引く時間をつくる。

(なっまいきーっ！)

それに気付いたミルチが《膺壁》を、ぎゅむつ、と絞めた。

「イっちやえくくっ♥」

「あっ、ああっ、だめ、待っ、へえええええっ!?!」

この後も、夜は長いのだった(笑)。